

エッセイ

たかが川柳されど川柳（七）

上野 一彦

老人ホーム考

一五年も前のことであった。大先輩であり、国際的な心理学者でもあったS先生夫妻が、都内の高級老人ホームに入居し、その優雅な生活のありさまが新しい老後の生き方としてTVで放映された。偶然、その番組を目にした私は、どれくらい財産があればそんな決断ができるのだろうと思いつつも、「でも老人ホームは老人ホーム」という固定観念が、正直、どこかの奥底にあった。

その後、先輩たちの中に、かつての学者村的な別荘熱

の流行りのように自宅を処分し夫婦で介護付き老人ホームに入居する例をよく耳にするようになった。それが子供孝行でもあるという。大家族から核家族へと変化した今、それも妥当な一つの選択肢になってきたということであろう。世界有数の出生率の低さが国力の陰りとなっており、子育てのしやすい国であることの大切さが言われて久しいが、もう一つ、老人が安心して歳をとることのできる国であることについては、かなりおざなりな施策展開であることに、昨今の政治家のイメージ力の貧困さを実感する。

たまたま手にした「ロスト・ワールド」ならぬ『ロスト

・ケア』（葉真中顕著、光文社文庫）は介護をテーマにした衝撃のミステリーであった。流行作家というものは時代の抱える課題を先取りすることに対し一種の鋭敏さをもつ発達障害というジャンルで仕事をしてきた私は、古今の小説の中でそれらの題材が上手に取り込まれていることをしばしば実感してきた。

誰もが逃れられない「老い」、その最後をどう迎えるか。それこそ究極のテーマであり、宗教の源でもある。中学生の頃、母親の本棚に見た深沢七郎の貧しい山村の姥捨ての風習を描いた短編「檜山節考」もそうだった。今や家族介護は神話となり、自己責任として認知症になる前の判断が自らにも問われる。

定年後、年金生活だけでは夢見た豊かな老後が保証されないことは自明となり、まだ自分たちは何とかなっても次の世代はどうなっていくのだろうと心が痛む。マイナス金利の中で、デフレ脱却だけが豊かさへの近道だと、心を感じさせないあのロボットのような口調の政治家たちはいったい何なのだろう。一〇年前、母を看取った後、今は父と義父母の三人をホームに抱える。家族に介護が必要になったところが、今や自分や妻に介護が必要になった時が現実の延長上にある。



（四季は巡る カラマツ 上高地にて）

話題を『ロスト・ケア』に戻そう。まず、冒頭の「天国と地獄」では、老人をめぐる「えげつない格差」が提示される。「天国」は佐久間の紹介で大友の父が入った富裕層向けの老人ホーム。インターネット回線から天然温泉までさまざまな設備が整っていて、二四時間の完全介護も付いている。一方で、八賀市で暮らす洋子は、自分を取りまく世界を「まるで地獄だ」と思っている。幼い息子をひとりで育てながら、母の世話をしなければならぬ。優しかった母は娘を「ケダモノ」と呼び、頻繁に暴れる。

在宅介護も短期間なら可能だろうが、その認知症の進捗と介護の期間は、美談を悲劇に変える。そんな折、巷では某知事の辞任が話題になった。母親を介護したと大言壮語し、それを福祉の専門家であるかのごとき姿勢で知事にもの上がったが、すべてが虚像であった。

週刊誌のリークも恐ろしいが、オリンピックまで続きたいとあの手この手の連発には、「せこさ」を超えた哀れささえあった。天網恢恢疎にして漏らさずである。「せこい」はそのまま英語にもなったとか。この話題をネタにいくつか句にしたが、いずれも出来は良くない。題材悪ければ句も然りといったところか。次回に紹介する、一七文字の破調句は誰からも評価されなかった。

リオ五輪セコイも辞書で参加する

天知る地知る文春知る人知る

いずれにしろ老人問題は、自分自身も避けて通れないことであり、認知症で判断できなくなる前にコースを選択しておきたいと、わが家では目下、資料を収集し検討中である。

老人をテーマに二句。

食って寝て好き放題に言い放つ

ヘクションと所構わずご老体

障害考

ISを標榜する自爆テロなど、世界のいろいろな国で爆弾や銃によるテロが横行する悲しいニュースがあふれる。

わが国では、神奈川県にある社会福祉法人が運営している知的障害者の入所施設で、障害のある人たち一九人が殺されるという悲惨な事件が起きた。容疑者として逮捕されたのは、施設で働いていた男性で、「障害者はいなくなればよい」ということを犯行前に語っていたという。

私はこの言葉を聞いて、自分の若い頃のことを思い出し

ドキッとした。私には重度の障害をもつ弟がいた。日常、兄弟げんかもしたし、一緒に生活する分には何の抵抗もなかった。しかし、家族で外出したり、学校に行くようになってからは、人を介して、弟の平常ならざる存在についていやというほど思い知らされた。

私が教育相談中、特に発達障害の相談などで、「障害のある子供はもとより、障害のない兄弟、姉妹にも気を使いなさい」とあえて保護者にいうのは、こうした私の育ちからの受戒がそこにはある。

両親、特に母親はこの弟のために自分を犠牲にしてあらゆる愛情を注ぎつくした。幼い私は弟に嫉妬もしたし、親の目を盗んで意地悪もした。親からは過度の期待を感じつつ、「おまえはちゃんとしている」からと、療育に連れまわされる弟の留守にいわれ続けた。おまけに周りの人々から弟のことをなにか言われるたびに、それが同情的な言葉であっても、「この弟がいなければ」、「みんなと同じような兄弟なら」と思うこともしばしばあったことを苦く思いつく。

自分が進路を決める時期がくるころには、弟のこととは全く無縁な道を歩もうと思ったことも確かにあった。私が宗教に関心を寄せたり、一九歳の時、教会で受洗したりし

た背景にも、逃れられぬ宿命の網をどこかに感じていたからかもしれない。親は自分の好きな道を歩めばよいというばかりではあったが、医療や教育の道へのひそかな期待をやはり感じないわけにはいかなかった。大学で、三木安正という戦後の障害児教育の先駆者の教室を選んだこともそうした誘いの一つではなかったろうか。気がつけば、障害を持つ人々を支援する今の仕事に否応なく取り込まれていった気がする。

そして、ある日、自分は弟や、弟を思う親に自分の生きる道を示され、導かれたのだということをはっきり知ることとなった。その弟も五〇歳で亡くなったが、私にはかけがえない肉親であり、かけがえない先達であった。今日、障害にかかわる支援の仕事を天職としてきたことに、改めて弟に感謝する自分がいる。

障害のある人々との付き合いの中でたくさんのことを学んだ。大学に勤め始めたころ、地域で、訪問巡回相談の仕事もしていた。重度の障害があつて学校にいけない寝たきりの子供さんの家庭を小学校の先生と訪問し、子供さんと関わり、親御さんの相談にのる仕事であつた。相談にのるなどと偉そうなものいいだが、実際には、そのご家庭、ご家族からたくさん私自身を教えられた。

子どもの世話で旅行一つできなかった母親が、自分の親の納骨のために数日間、初めて子供から離れ、郷里に出かけた時のこと、重度の障害でしゃべることもなにもできないその子が、医者にもよくわからない原因不明の熱を出した。もの言えぬ子供であっても、母の不在を全身で感じ取り、不安から身体の不調をきたしたのではないかとの診たてであつた。

その子供が、中学生の年齢になった頃、短い生涯を終えた。親御さんのそれまでの長い献身的な苦勞を見てきた私が、「お母さん、これからはお母さん自身の人生を生きると天に召されたのでしょうかね。」と慰めの言葉をかけたところ、「それでも生きてほしかった」と泣きながらいわた。この子が母親の生きがいであつたことを、痛切に思い知らされたのである。死んでよかった子供などどこにもいないのである。

この歳になると、周りで似たような歳の方の逝去の報に接することが珍しくなくなった。ひと月ほど前のこと、中学校からの友人で、青春時代を共に生き、卒業後は新聞記者をしていたひとりの仲間を亡くした。定年を目前にした一五年前、若天性アルツハイマーを発症し、在宅介護が難しくなり八年前施設に入所し、最後は寝たきりのままで

あつた。

その長い闘病期間、必死に看護してきた奥さんに、「彼も本当によく頑張つた。今はゆっくり休んでほしい。でもこの言葉は、彼が一番奥さんに言いたかつた言葉かもしれない。」と思わず言つてしまった。

先日、もう施設に行かなくていいんだという現実にかえつて戸惑い、寂しく思つているということを彼女から聞いた。親子も、夫婦もその絆の深さは周りからはわからないということを改めて知つた次第である。

障害者を大切にすることとは、子供を、老人を、人間を大切にすることであつて、だれだれは必要、だれだれは必要という考えは、世界の歴史の中でも危険で誤つた考えであると確信する。このことを多くの人々と共有したい。

自分が年老いた今、安心して歳をとれる社会であつてほしいと強く思う。それは同時に、子供や障害のある人々、病のうちにある人々を大切にするとともに太い絆で結ばれていることを再認識する。それこそ人間が人間たる智慧と文化をもつて生きるということではないのだろうか。



（飾る錦は誰のため 楓 奥多摩にて）

たかが川柳 されど川柳 （平成二八年上半期）

一月

お年玉渡したとたんにもう帰る 佳作

正月とお年玉はつきものだが、全国平均2万5千円だとか。じいちゃんやばあちゃんは格好のターゲット。お金よりおもちゃを喜んでいたあの時代が懐かしい。何も言わずにいそいと袋に間違えないような名を入れている自分も正真正銘のじいちゃん。

署名入り千円札で初詣

いつもは五円、一〇円だが、初詣、しかも由緒ある神社ともなれば、ここは一枚奮発するか。でも行きがけにそつとお札に署名しておく。だって神様だって多く議で覚えられないんじゃないかと。

飛んでくる賽銭避けるおちよこ傘

この日ばかりは混みますね。神殿近くに来ると後ろからの投げ銭。コントロールの悪い人もいたりして、思わず傘をおちよこにさしたら、なんぼ集まるかなどの想像するのは不信心もの。

題詠「悔い」

まだ早いわが人生に悔いはなし

わが人生に悔いはなしといってみたいものです。読んだ本に、『武士は悔いず、恥じずに生きる』とありました。さすれば、わが人生は、悔いと恥ずかしきことのみ多かりしということになる。残念。

後悔と誓いで作るミルフィーユ

後悔と反省の誓い、その繰り返しはまさに多層に重ねたミルフィーユのごとしという句です。ミルフィーユでごまかすのは甘いといわれそう。

再婚は悔いと記憶の弱さから 佳作

結婚の失敗は忍耐力の欠如、再婚は記憶力の欠如とはよく言ったもの。まだまだ悔いも足りない再婚はさらなる危機に。しかしそれを繰り返すのは羞恥心の欠如なんでしょうね。

二月

妻からの義理チョコひとつびターだね (佳作)

あれほどの栄耀栄華を誇った御仁もエイジングとともに人気凋落。ついには娘からのチョコも届かなくなり、今や妻からのチョコのみ、それも義理チョコ。実に人生はダー

クであり、ビーターなものです。もちろんわたくしの話ではありません。

なごり残雪手本示して消えてゆく (佳作)

名残雪としたのですが、イルカの歌も連想させるならひらがなが良いとのご指摘。まことにごもつとも修正いたしました。晩年になれば、見るもの、聞くもの、なにかも自分に結びつけて考えるもの。淡く、そつと、自然に消え去ることこそ最高の願いです。

鬼は外投げたむこうに妻がいた (佳作)

どうもなりすましが多いのですが、節分に因み、こんな風景面白そうですね。決して意図的ではないにしても、日常生活の中にはこんな緊張の一場面もあつていいかなと。

題詠「味」

母の味妻が越えた日惚れ直す

よくある句想ですが、母の味は夫に向けたものというシビアな見方もあります。しかし、母の得意なイワシのつみれ汁に妻が挑戦したとき、そんな思いがしたことをふと思ひ出しました。

味濃過ぎ家で浮きますお父さん

味といってもキャラのことですが。そんな親父の面倒くささ、家族の中で浮き気味なのは、塩分濃度が濃すぎる

からとかけたつもりでしたが、あまり共感は得られなかったようです。

味があるそう煽てられ失敗し

ユニークというのは褒め言葉か、けなし言葉か。個性のあることは大切ですが度が過ぎると危ない。味があるなんて言うのもギリギリですね。味ありすぎて変わり者のほうがわかりやすいですね。

三月

うるう年その一日のありがたみ（佳作）

4年に一度、オリンピックイヤーは366日。次のうるう年も必ず迎えられるとは限らないと思うような歳になってきた。日一日が愛おしくさえある。2月29日はなんだか儲けたようなありがたい気持ちになりませんか。

桜待つあなたが先に散りました（佳作）

今年も桜の季節が来ました。まさに待ちに待った季節です。友人と行く花見も恒例行事ですが、その友人の「来年も来られるといいな」のつぶやきが妙に心にしみました。

安らかに齢とれないぞ日本死ね

「保育園落ちた。日本死ね！」が政治を大きく動かしま

した。こんな必死のつぶやきを先取りできぬお粗末な政治家ばかり。安心して老後を迎えられない世の中、老人を大切にしない国は亡びると思わずこのパロディ句が浮かびました。

題詠「鏡」

姿見の母の面影DNA

鏡の中の自分がやけに父に似てくることに愕然とします。あえて女性の目から母親の面影が濃くなってくる姿見の自分にDNAを感じるわけです。

歳かさね次第に凸化わが鏡

鏡の館ではないが、凸面鏡はやたら太って見えます。えっ！この鏡、凸面鏡ではないって！ということは・・・デパートの衣服売り場の鏡は少々凹面鏡になっているって知っていますか。素敵に良く似合うと家に帰って姿見を見て違和感を覚えるかもしれません。

シミ小ジワ鏡勝手に歳をとる

この鏡、やたらシミ小じわが目立つ、変な鏡！と思う方はいませんか。その真実は受け入れがたいものです。鏡のせいにしたくなるあなたへの一句。

四月

階段の手すりを磨く老いの知恵

数年前、フランスの地下鉄の駅で地図を見ながら階段を降りていて、一〇段ほど踏み外し、救急車の世話になったことがあった。それ以来、階段、特に下りでは手すりを掴む様にしている。いわゆる手すり磨きである。

騒ぐ孫電池切れたか眠りつく（佳作）

人並みに孫の世話が生活の中に組み込まれている。「ジイジあそぼ！」の一言で、なかなか大変なお付き合ひ。そんなエネルギーに満ち満ちた孫も、眠くなってくると訳が分からなってくるのだ、突然スイッチが切れたように眠りつく。

一人欠け二人欠けてく花見です（佳作）

毎年桜の季節になると友人たちと花見に行く。定点観測の場もいくつかある。しかし、昨年からあいつが来なくなつた、今年はいいつが来ない……。毎年メンバーが少しずつ減っていく。

題詠「肩」

子育ての重荷おろして五十肩

子供が成人し子育てがやっと終わつたと思つた頃に五十

肩。肩の荷がおりると肩が回らなくなる。そんな状況を一句。

お疲れさん後姿の肩丸く

定年を迎え、あんなに元気だったお父さんもなんとなく角が取れ、穏やかに。後姿の肩もいかり肩からなで肩に。

調子づきおんぶに抱っこ肩車

おんぶに抱っこは日常茶飯事だが、さらに過酷な肩車。孫との付き合ひも体力勝負。誰に似たのか調子づくと終わりが見えない。

五月

火の国のマグマに泳ぐ大ナマズ

熊本震災、間もなく東海地震と思うと他人事でありません。それにしても前震、本震、余震、一〇〇〇回を超えるとなると自然は怖い。そんなスケールの大きな川柳に。トランプはババを引かずに生き残る（佳作）

アメリカ大統領選挙。泡沫候補が今や代表者に。良識は常識の外にあります。カードゲームは子供のころトランプといいました。最後まで生き抜き今や大本命。

少子化の波間に泳ぐ鯉のぼり（佳作）

少子化が言われて久しい。端午の節句のこいのぼりも

昔よりは減っているはず。世の中の波間に喘いでいるような鯉のぼり。

題詠「走る」

年寄りはず動かさず口動く

だから嫌がられるのかな。でも確実に手足の動きは緩慢に。口もそうなれば愛されるご老人というわけ。

急いでも走らぬ歳になりました（佳作）

「走らぬ」でなく「走れぬ」だろうといわれますが、自覚が出てくると走らなくなるのです。なにごとくもあわずゆっくり。

のんびりと路面電車の走る街

昔、路面電車と走りっこした思い出があります。いつの間にかスピード、スピード。でも幸せになったのかなと思うてしまいます。

六月

裏金がゴリンゴリンと回ってる（佳作）

五輪を巡ってはいろいろなことがありました。スポーツの聖典なのに政治家が絡みすぎています。欲と金のあるところいろいろな人が絡みますね。

ライン利用もつれた糸がまた絡む

スマホのライン、世界中無料というところがいいですが、便利すぎて気のつかぬうちに人間関係を難しくしたりすることもあるようです。

ブレーキをかけて後悔夢のなか

色っぽい夢を見たのについて自制心が働いて：せめて夢の中ぐらいい自由奔放に生きたいがそうはいかぬもの。

題詠「空」

梅雨空に女心の七変化

空梅雨とか。梅雨になるとお出かけもいろいろ左右されます。この移ろいやすさは女心にも似て、その下に咲くアジサイもまた・・・なんて訳知り顔に。

お出かけは妻の機嫌と空模様（佳作）

女性には太陽。友達と出かける楽しい山歩きも家内の笑顔で見送られたい。それと空模様。元気に出かけ、お土産とともに帰宅するのは最高の幸せ。

満天の星が見ている出処進退

天網恢恢疎にして漏らさずとは言いながら、都知事の出処進退は格好の週刊誌ネタ。やつと辞任しましたが、男たるもの小さな間違いが大きな判断ミスにつながる良い例でした。

（了）